

○二月朔日 快晴 六半時桑名宿出立候而庄野にて晝休いたし關に止宿
○昨日の雨山はみな雪にてさむさ甚し

春雨空カに似氣なき寒さ知られけり晴てけさみる峰のしら雪

昨日の悪寒の氣更になしよりて今日は江戸出立已來初而歩行三里余いたし申候少もつかれなしふせり候節かゝり湯いたしこれにては全快なるへし春岱かひけもならずと申たるの尤なること此節相分さて、長き風邪なり○庄野宿の雲介俊藏のかこにすかり頻に御機嫌克を申某は伊奈半左衛門次男半十郎也御救に預たき由等申たるにそは、その様なるものは雲介にいくらも有珍敷なきことをいふ奴也と道中師に叱られてわかれになりたるよし人足等々咄にては齋藤彌九郎か弟子の劍術遣ひにては軍書の講釋をもいたし候由馬之口のもの、話にては氣違とみえ候由也

○二日 晴 六時過關宿出立候而土山にて晝休石部宿に止宿○けふは六

七里を歩行なるへし鈴鹿山など勿論皆歩行也○浴あみしてみるに大の男二三人地ひゝきして東西へ奔走しかる石はいつこ御下帯はみえぬなど大にさわく也さて如水じめくしたるゆかたをきする躰等元來不なれ故也其上に我をことの外に恐れて却てよく出来かぬるか也已後は半は表住居にして平日遣ひたらは近習共かくは有ましおさとならば十篇もこゝとを可申をたゝよし、といふはかり也こゝにいたりておさと平日世話之行届かゆき所へ手の届か如くなることをよく辨たり歸りてもこゝとは申ましかはゆきおやちには旅をさせろにはあらぬか

○三日 雨 六半頃石部宿出立候而草津にて晝休大津へは九時半時之着也○御代官并京都詰之支配向笹原太郎兵衛之類に至るまで来るさても混雜也四時前に晝飯いたし候計ひたるさに不堪當惑之處俊藏買來たるうはかもちをくれたり高麗へり上段之間にて竹の皮を開其もちを六ッ給申候これも旅中故也

○四日 晴 されと折々風ふきあれてくもり雪ふり申候○六時前之出立にて京地の参り所司代并兩町奉行の御届いたし申候淺野相替候事無之候○所司代は居間至る間近之女共住居之場所を之出火に在所謂命からくのけしき也此節は左衛門尉か以前旅宿たりし妙顯寺に御旅宿也それを隣は本能寺にて即備中守殿御旅宿也其次天性寺と申左衛門尉之旅宿也其外御目付御右筆共に其軒ならひ也門前は寺町通とて祇園へつゝき至るにきやかなる町也たにさくや刀屋びいとろ器類のみせフレッキ類をみせ等色々ほしき品々並へ立あり○貴志を來たる菓子今日まで少も味不變黄色なるは玉子のきみなりよほとよく製したることゝみえたり青蓮院へ可奉と持參の菓子はかひたり貴志は大雪中歩行に在品川まで來るに飯をも給させ不申候而歸したり以上之こと序によく御傳へあるへし○風邪全よしされ共耳は不快中のことしやゝかな豊のことし左の耳は常のことし左の耳右のことくならは是大越幾之進なるへし○旅なれたりとおもふは旅中も京

都着もさして物ことおつこうならす候勿論宅にあるかことくにはあらず食まづし不自由とおもふ時は古人陣中のことを思ひていましてとす○二月五日 くもり 備中守殿其外京御着也右に付御旅館に參る七ツ半時退散也寺町通に付至るにきやかに付見物至る多し○奈良を羽田健左衛門かゝや助藏惣吉之悴親惣吉は病死長吏來る狭川隆助は病死いたした恒三郎いま候由也

○六日 くもり 寄合にて一同備中守殿御旅亭に罷出候○健左衛門義同人甥之與力同道に來る逢遣し候目は正月七日頃より宜相成候由に在書物等にこまり不申候由也○京都之御役人之外別席出來居候る林大學頭はしめ御右筆まで一同参りしらへ物いたし申候辨當持參也

○七日 晴 備中守殿に罷出候る六半時之歸宅也

○八日 晴 昨日俊藏に土産物爲持候る青蓮院へ差出候處御家來共もと南都之御奉行之御家來也とて俊藏之名も辨居候由殊之外にとり持候由

先帝之御法事清涼殿にて御修法也にて 御所に御詰切なれと被進物を義に付直にこれより参候申上候由等申聞候由也○高橋正橋來る不相替候年もふけ不申候内藤左衛門は六月十六日うてたまこを給當り夫か發病に其月うち大病之由六ヶ敷相成候麻上下を着し脇差をわきに置東へ向ひ御暇乞申上候由申之拜いたしはらくと落涙其後は手代を呼御勘定心障無之様諸書物大切に可取締旨申之候外一言之ことも不申候三日相立大切に及び候由麻上下に相成候節家内差留候得共不聞入遠國に百姓町人之如き死方にゐは 御威光に拘候由其外死候とも東は足にはいたす間敷なと申たるよし扱々感服也存命中はさほと人とは不存驚入申候我等かことき者にはよき教也○青蓮院宮は此節 當今の御兄君と申殊に御才子に付 御所之御受宜候殊之外御勢宜候由廿一二歳に被爲成候節別段の御懇命なりしか御才力別段毎事驚入たる御人故さもあるへしものいひさかなきものは伏見宮御さと場故か今大塔の宮など申上候由よほと御英烈

なる御本性は以前之如くと被察申候南都の頃も公事裁斷等興福寺三万石の事には殊に御心を被用御佛書はあまり好ませ給はす貞觀政要其外の儒書をよくよませられき

○九日 朝しくれめきたる雪晝晴山の霞實によろし歌にいふかことし此こと關東にはなし○備中守殿別段 御使の廉にて参 内也小御所にて天顔拜有之候御自分之御禮は御椽に有之候由陪臣天顔拜關東の執政故なるへしはしめは御勘定奉行御目付は御附添にて参内之積也しか夫に不及して相濟申候○なら米屋平右衛門之代を兼る百姓喜三郎來る老人のはるく來故に逢遣し候

すき鍬を朝な夕なの露の間も忘れぬそ身の寶也けるといふ歌を以前よみて遣したるを今以よく守り七十余に至れ共かくの如しとてあかきれ所々つくろひたる掌を出しみせたり其朴直尤よろし平右衛門は没して當平右衛門は其子也親代の如く儉素にして豪富を失ふへか

らすと傳言いたし遣し候ならにて御評判よきを承候よろこひ申候すき
歟の御うたは所々の百姓共守り也とて寫參るよしなと云赤面此事也婆々
も七十なれと健也くれく奥さまへ宜なと云也○本多美濃守殿御家來尾
崎古八郎鯛一尾持參旅中見舞として來る以前は十藏樂水様御也といふ人は
用人とか承り主人差料の脇差を貰たるよし兼承候か今は徒目付也と申
也家いたく衰たりとみえたり金百疋菓子折遣し候○備中守殿 御使御口
上は 禁裏彌御安全云々と有御勇健御機嫌なと、はなし何々と思召候と
認るこれ往古々 御使を兩卿へ被遣候御書牒也○元來は衣冠にて御附添
申上候參 内之積也しか御進獻物に御右筆附添布衣淺沓を用ひ申候右
にて兩人は御附添に不及實に官家之人に被笑不申もよし沓は至るはきに
くし左衛門尉なところひ候は受合なり其患もなく助りしは實に天助なる
へし

○十日 晴 今日はいろく調物にて備中守殿御旅亭には不參候○中條

良藏橋本喜久右衛門興福院を使來る○青蓮院宮を御尋被下是非御逢被成
度候處御用から世間之聞へ如何可有之哉依るは御用濟之上にて一日必參
り候様との御沙汰也御用濟之上は其翌日にも出立之合に付難罷出其已前
に候は、備中守殿の伺之上否可申上旨申遣す○京地の劍術遣ひ其外人々
來りて朝五時を晝前は夫にかゝり居候今日も居ふるへ入候處少もさはり
なしされ共耳は同じこと也○今日わか肖像の讚をおもひ附候

○十一日 晴 傳 奏廣橋前大納言東坊城前大納言議 奏久我大納言萬
里小路大納言徳大寺大納言備中守殿に被參候間罷越申候右之人々所司代
本多美濃守殿并備中守殿列坐之御席へ左衛門尉并御目付岩瀬肥後守罷出
候る西洋之様子等委細に詳に申上る○昨日井上信州を御用狀并日記來る
江戸表相替候義無之旨承候る安心亞虜官吏腐敗熱に付相用候カストリニ
ムといふ藥一兩目百兩位之由驚申候曾るきカストリニムは海獸にて其

藥効は麝香に同じきものにて熱病之大妙藥のよしニムはへそとかあふらとかいふことにはあらぬか○われ 公方様之 御前へ御三代共に罷出度々御用相勤宮門跡公家衆御三家御三卿國持大名と御用談をいたし其上阿蘭魯西亞アメリカ等迄と談し事いたし申候此上は 禁裡様に御直話なきのみ也

○十二日 晴 昨日のあさも雪今朝も晴なれと氷はり申候京師の寒氣可驚今日は備中守殿關東之 御靈屋知恩院其外に有之候に付御拜として御出に付宅調也○古銅器之名人龜文亭參り不申候に付相尋候處段々貧に成當時は乞食に相成候位之事に於行衛しれすと申也かれか名人にて身持惡敷れはかくの如し可惜其外に古銅器等を造る五郎三郎といふもの有小サなる一わたり之銅藥罐には少々入念たるにて内に金はく置あり一分位かとおもひしに二兩也と申也驚て早々歸したり京師にはかゝる細工人有也買てよきものは土瓶なるへし○青蓮院宮より今般は必御逢被成度候處御

用柄に付相濟次第に參殿之義御沙汰可有之旨御内々御側使を以申來る御用濟に候得は直に出立之積に付可相成は此節御沙汰有之度左候は、御老中へ申立候而直可罷出旨申上るこれは備中守殿其外御目付等より内々申旨も有は也○青蓮院宮此節は親王方等之内に於第一之御才子にて京師に於更に及ふものなく 玉坐近く被爲入候而いろく被仰る、御人は此宮御一人のよしさもあるへし南都に於屢罷出候而御酒被下之節等御才力には殊に驚たれば左もあるへしと奉察也世間之風聞には今般之事に關白殿傳 奏衆其外其筋之人々之外に密に其議被加候御人は青蓮院宮也など例之取沙汰を申也今おもへは我家來之内用人共はみな此御宮の御慰とは乍申御酌之御酒被下も有たる也勿躰なき事也○大坂々青木洪齋來よき鯛其外くれたり一兩日は止宿いたし居候積之由也○曆をみてこそ初午とはしれ太鼓の音もなく旅館寂寞たること也

○十三日 雨 傳 奏議 奏に懸御目度義有之備中守殿御旅亭に罷出候

而面謁東坊城前大納言殿廣嶋^{橋カ}大納言殿德大寺大納言殿被參候德大寺を尋
之品有之候而夫々及辯論候○青蓮院宮を近々御逢被成度旨御近習使にて
内々申來る殊に御懇意之御事也

○十四日 晴 宅調奈良人其外支配向等來り候而事多し玉井金七郎之養
子千之助來るこの者學者也錦太郎實弟に而京地の參居候もの也江戸表へ
出度と之心願と聞ゆなら人にはめつらしき事也長吏菅之助相果候由物か
たるならを去こと八年當御用にては死たるもの多し丁零^{令カ}威鶴となるも夢
しはしのことなるへし

○十五日 晴 例刻を備中守殿御旅亭に罷出候御用向いまたいつれとも
相決不申候此節初而公事人共を長く留置候事之よからぬわけ相分り申候
一日百日のことし何も大切之御用にて歸情之切なるにはあらずいろく
とおもひ候而先をはかれは也○二月四日まで之日記其外來る一覽いたし
候積之處明日御用狀出候に付飛々に一覽也先におさと持病發不申候由并

太郎之日記大慶也其余一同之無異夫々相分り申候安心候太郎出精可有之
候家來共一同夜廻り等いたし候由是又安心之一ツに有之候虎之介素讀其
外之世話有之候旨是又不相替之出精と存候○江戸表大火に而築地其外不
殘八丁堀邊も焼失之由今朝飛脚屋を申來る大に驚申候乍去先ツ小源之宿
之外は氣遣ひも無之候遠國之書狀はみるもいやみさるは心懸り也

○二月十六日 天氣殊によろし霞鶯の様子實に譬るにもものなし○備中守
殿御旅亭に晝前出るのみ也此節こゝの旅籠やに所々諸侯の家來珍敷まで
に夥旅宿いたし居候由人氣かくの如くなるに京見物等少もなりかたしい
また御用之外一步も出不申候○遅き八重の紅梅彼岸さくらさきかゝりたり
故郷の馬場の櫻咲ぬらし旅のやとりの花におもへは
歸り行鷹をけにもとおもふかな花の都の春に逢つゝ

○十七日 晴 霜雪の如し毎朝如此にて晝はよほと暖氣也○南都寶藏院
之後見三田權平こと中川大學來る槍術のことを咄す生涯修行して藝を上

達する積所謂死してのちに止といふ執心也感服也市三郎にも槍を遣ひ候様くれく傳言したり○青蓮院宮を來る廿日參殿候様之御使者來る○麴や源兵衛之親來りて源兵衛之禮申述候立派なる人物也京大坂中太鼓打の上手に薪能へ參候而相勤其後大乘院殿其外へ被召候而今日南都を京都へ參候由を申也源兵衛事江戸を歸候而更に別人のこととして殊に喜ひたり源兵衛江戸の錢湯はしみ候由屢申也中間共之内に夫は唯今迄厚着をいたし候もの之はた薄に成たるはしめて之冬故に惣身ひゞに成たる故に湯のしみる也あまり人に御咄しあるへからすはだ薄なるかしる也と申たるよし也大坂にて下女下男をも遣ひたる用違わか足輕になりたる故に辛苦せし也されと元來馬鹿ならぬ故に早く氣をつきたる也此頃もみるに源兵衛江戸足輕とは十段も立上りたる男ふり也

○十八日 晴 備中守殿二條御城御殿向御金藏御米くら其外御藏々御見分に付陪從之廉に而悉參候而拜見いたし申候 東照宮 臺徳院様 大猷院様御上洛之節々之御品其まゝ有之候 東照宮參 内之御冠并御官服之類御三代之牛車等之類を御臺所御道具きりため貝杓子飯櫃之類より薪まて有之候諸大名を献上之品々寺社を献上之御札等も有之候其内惣銀之御

膳椀御飯櫃惣まき繪之御馬具等眼を驚候もの不少其頃之蠟燭其外迄水引をかけ候まゝ有之候奇と可申は御下帶まで献上之まゝ有之候紅白其外都而五色一筋つゝ也其頃之牀おもふへし○歸宅六ツ時前也江戸を三日半時之早備中守殿へ參候由に而市中とりく之咄也と申候内御同人を書狀御廻し也下田之事さては宅近邊を出火等之事也類焼無之候而大慶也太郎馬にて井上へ參り奥方は牛込まで御立退之由驚入申候下田に參りつなみにて左衛門尉必死をまぬかれ其翌年京都御用中宅之大地震今般之御用中右之近火いかなる事にや○法隆寺普門院大和を尋來るいろく之風聞に而左衛門尉切腹之由三度迄承り候得共武運を日々のり候に少もかはりなし偽なるへしとおもひしなと例之狂狷を極たることゝもを申候不相替深切之僧也 後醍醐帝陵之歌を京へ差出たるに堂上にて評判殊によろしく候由并普門院か橋霞のうたに

大木曾の谷のかけ橋わたりつゝのとけくおもふはるかすみ哉

といふ歌よみたるよし申たれば

世の中をわたるもかくやをく霜にたとる朽木の谷のかけ橋

とわれはよみ可申をうらはらにて同意也なと物語候○青蓮院宮が大造に立派なる御菓子并御茶被下之御使之者咄に南都にて御懇意の昔に被爲替候事は無之候に付刀をも菊之間まで可持上午刻過とは被仰出候得共兼御尊も有之必朝を御待可被成候間少も早く參殿候方御氣色可宜旨等家來の内談いたし候

○十九日 雨 例刻を備中守殿御旅亭へ參る○はや京都にも半月余也い

また何とも不相分長大息此事也○耳のなること殊に甚しよりて戯に

遮看靄色衰眸外妨聽蟬聲老耳中一物僅存蠢動意竊歎汝有舊時風

といひたれば岩瀬はしめみなく絶倒す舊時風とても難成なと口々に云也再ひおもふ張横渠か説に戯は心より起ること也とて頑訂をつくられたりとよりて改ふ

年々翳甚衰眸靄日々聲喧老耳蟬自識精神亦如是挂冠好學醉鄉仙

これにてはいかゝと申せは平仄も無覺束先の方おかしけありてよしと申也とてもおもしろきことは不出來おかしくは夫にて可宜といふ人々みな大笑いたし申候

○廿日 雨 青蓮院宮へ九ツ時を參る歸宅六半時也不相替之御懇に兩親をおさと市三郎太郎か事迄夫々御尋也八ツ半時頃を御酒被下候例之御酌等給り申候當春 主上御内宴之節被下候御陶盃にて御盃被下候間夫は江戸へみやけにと返盃はいたし不申候而持歸申候色々と出候御肴をこれらはみな高村俊藏供にて參り候由に付可遣と之御沙汰也重箱は入被遣候當人恐入候涙申候 扱々なら一乘院の頃を一段之御上りにて御學問も御出來被成たるか當春孟子滄浪之水の章のみつから取と申候所に深く御感ありてみつからいまして日々御覽被成候由に侍讀之儒に御するさせ候御扇子等拜見被仰付候間感心候わかくの如しと人君の學は孺子か滄浪の章をかく

孔夫子の仰られたるかごとく耕夫漁人等かいふことにててもよきは御取用ある故によく諫をも御用は勿論也此章に御心を用させられたるは奉感よし申上る夫を左衛門尉か例のおとけはなし等にてかしこくも御勘定所にてはなしのことくなることなと申候間大に御笑ひにて京都へ参り六七年中關東の人とかくはなしたることなし全なら已來の懇意別段なること也とて強而御とめ故に遅くなりたる也此節青蓮院宮之京都之御威光は別段なること也青蓮院宮へ罷出候節これみよわれかかたみとおもひて今に持居る也とて奈良にてあけたる桐つくしの銀の御きせる御差出御みせ被成候を忝し

○廿一日 晴 備中守殿御旅亭へ出る御用向いまたいつれとも不相分候近日兩傳 奏御出有之候由其節にて凡相決可申歟

○廿二日 晴 知恩院へ参る 慎徳院様御位牌所に参拜いたすこゝの方丈を廿日に宮へ被召候處風邪之由に不出今日参り候は、必逢候而何歟

申なるへしとおもひたるに風邪に而下痢有之いかにしても不被出とて役者を以申出たり七十余之老僧也不逢かた都合なれと知ル人なれば物たらすあはれにおもひたり

○二月廿三日 晴 瓦白くみゆるまで霜ふり申候○備中守殿御亭へ傳奏議 奏被参候なか、歸府之様子にてはなし○俊藏としやうを爲給候これのみは江戸よりやすしと申也○蘭人参着也○御用向にて九ツ半時分調物七ツ半時過をふせり候處蘭人之事に而六ツ時過に被起申候○かたのくつろきに毎日按摩を呼申候一昨年之按摩也一昨年とは聲少々違ひたり齒拔しやといふ也一同驚申候

○廿四日 雨 則暮秋の時雨に同じ寒暖相變するころは例京地かくの如し秋冬の甚しきかことくにはあらず○宅狀來る近火之躰委細に相分る飛火にてもえたちたる所あるよし或は長屋の窓を破りて家財を家來共出したるけしき等其危急おもふへし一旦立のき池魚に災不及して怪我もなく

歸りたる上は十二分のこと也凡三千兩之助りなるへし大によろしきか
くおもへは又瓦をふみ破り諸道具を損さし書齋之書たなを傷ひしかいか
になと段々と思ふ也これみな人欲之長する所也幸三郎宅焼失之由以前兩
家御手傳普請に亦出來し間もなく如此されとわか家のみかはりとおもへ
はよし幸三郎は遠國留守中別々幸也

○廿五日 晴 江戸を刻限附はや來る驚候處井上信濃守之文通等にてさ
しての事にあらず先安心也○例之通備中守殿へ參る傳 奏議 奏も被參
候備中守殿御直談に亦左衛門尉らは不出退散あられて後御用狀之調等に
て九ツ時過に歸候間もなく八ツ時也寐候と地震よほとこの事也被起申候一
同庭へ出申候○庭の彼岸さくらや、散かて也ことし馬場のさくらはいか
になとなれしあつまはなやちりけむといにしへ人のいひしこと、同し
○廿六日 雨 しくれの如し山近き故なるへし○八ツ時過よほとこの地震
也禁裡附は御機嫌伺昨夜も有今日亦同しかるへしとて大隅守は退散也六

ツ時頃を急に御用有之候を備中守殿へ再ひ出る四時歸宅也急宿次差立申
候これにて凡歸宅の目當つくへし

○廿七日 朝雨夕晴 こゝに蓮月と申陶器を業とするもの有一ツ燒ケは
十人も争て求むと云位也このもの、宅の串戸八十次郎參りたるに入口黒
板塀に切戸有て不快に付人參候も面會は其戸を押開てうちに入は風雅なる
柴折戸有そこに行て案内を乞は燒物師蓮月出たり人品宜老尼にて驚候由
上りみれはうたよみにてかたはら陶器をなくさみにするよしにて山ひら
ものなと少々有價下直也みなよみうたをしるし有歌を乞たるにたにさく
二枚くれたるよし至る謙退したる老婆也と也目錄を遣したるに辭て受取
さるよし也この尼化かしものにあらずは眞の奇人なるへしさすか都也か
ゝるものも有也

○廿八日 晴 ことによき天氣にてさくら盛に段々相成嵐山は節句頃眞
盛之由常之御用ならば朝之内乗切に亦も可參なれと此度は御用之外一步

も出申間敷と之事に而寺の櫻を居なからみるのみ○備中守殿時候御當候
而一昨日を御平臥御逢無之候○備中守殿御領分に出店有之候京地御用達
之町人御煮染を御旅中へ御なくさめに差上たり其町人御風味をなしたる
に塩あまくして味なしこれにては貴人には上られすと申たるに貴人故に
かくはする也味醂などを遣ひ味附たるは早く御あき被成候而上等之人
御上りにはならぬもの也某か味したるはいつ迄被召上候而も御あき被成
るゝことはなしといとはこりにかにいひてふく面をなしな脱カから丁寧に清ら
をつくして仕立候由至而淡泊にして上品之味なりきと串戸八十次郎語る
信長公は三好長慶之料理人
か申せしことこれに似たり

○廿九日 晴 さくら盛也○今日は御用無之に付宅調也都筑大坂酒三
升はかり来るならも上諸白一升はかり来る其已前も所々酒来る故に
今度之御用はねさけをのむ也其節は健藏必酌に出る美少年の御酌少も妬
氣なきめつらしき奥方にもこゝもちはいかゝ○江戸を状来るおさと井

太郎其外順作量右衛門の日記 御殿并用部やの日記来る其ことみるかこ
とく出火之節のけしき可驚可恐可喜扱 上の御恩難有おもふへきこと也
日記にしるしたることは別にしるさす候自分此節は無病也され共耳のな
ること前に記す詩のことし御案事有之間敷候○家來共之出火之節之心配
其外夜廻り之けしき等留守中殊更之苦心察入たること也され共今度は順
作量右衛門をはしめ虎之助等を差置たるはことによし量右衛門與助は二
度京都之留守に而災難に二度逢たるは殊に氣之毒也○太郎敬次郎共によ
く出火之節も世話にならざるよしおさとの喜ひこれ又安心也太郎の日記
來よく出来候而詳也され共今一段文段に氣を附よくよめ候様しるすへし
日記にて書覺候と辨書などに都合なるへし筆を以口舌のかはりをする様
にあらされは役に立不申候稽古之ため故骨を折認へし
○二月卅日 晴 備中守殿御旅亭へ罷出候御不快宜候得共御押被成候而
は如何と御逢之義は不申上候林家并津田半三郎大坂を歸來る

返し苗字さへ川
左衛門ハツテ
御聞なさら
う

初午か来ても歸らぬ馬鹿はやし

大江戸てかはにかゝらぬ左衛門は京へ行ても聞人はなし

といふ落首を承候○吉藏之悴松野八郎兵衛家來之供いたし參候由に尋

來る○黄蘗山へ隠元禪師カ寺持來候由之瑞圖之書四幅をみる實に別段也川上

謙三郎彼を學とみえたりよく似たる所有○悅山唐僧也と柳澤保山翁と之問

答筆段有保山之筆感服也豪傑に無相違大に驚申候

○三月朔日 くもり 備中守殿御旅亭へ參る御快候一同行追々御逢有之

候○江戸を御用狀來る二月廿八日附之書面今八半時頃受取○青蓮院宮へ

懸御目度義有之候而俊藏を使者に差出候處御さと坊へ御出故追而御挨拶

之旨申來る御さと坊と申候は御參 内之時先ッそれへ被爲入候也○林大學頭宅を

申來候由にて初午か来ても歸らぬ馬鹿はやし○江戸てさへカハ返しか苗字てもカハに

はテテン天子も御聞なさらう

○二日 春雨うちけふり東山霞の底にあるかなきかにみゆるけしき實に

都のはるうたの偽ならぬをしりぬ○黄蘗山にある張瑞圖の書を淺野和泉

守奥かたのうつしたる元書とならへみるにいつれか寫と人々見まかひ候

る其絶技に驚申候

○三日 風又雨にて折々日かけさす時雨に甚似たり山近き故なるへし○

都筑を重つめ來る○俊藏とくり携來りて白酒を爲給候一升三匁也といふ江

酒なし二百五十文を以上酒と今泉憲藏は都筑之世話にて 禁中鶏合拜見

とする土地なれば白酒も下直也

として參る○岡本花亭對州にて上巳に四千里外窮邊地唯存桃花似武城と

申たるかそれとはことかはり皇都の上巳なから桃花のみ江戸のけしきに

て旅は都も鄙も同じしこと也

○四日 くもり 備中守殿御旅亭へ參る

○五日 くもり 五ツ半時頃江戸の宿次はや備中守殿に參る備中守殿御旅

門前を通る也故に家來共そりやと申候而直に供揃出來也御旅亭へ參る傳 奏

青蓮院宮へ
廿一日に参り
東門跡蓮門は
日参り廿二
坊御留にと
て日々参る
と必夜御参
内過本坊へ
時御本坊御
故歸なく御
御坊に御留
さ迄御返り
日よし御返
とよし御返
し御也

議 奏も被參候存外に早くすみ候而七半時歸宅也

○六日 くもり朝雨 在宿さても待遠なること也日々川留の如し

○七日 晴 備中守殿御旅亭へ出る○朝く庭中の遠足にて足袋きるこ

と甚し○けふは備中守殿淺野又は大坂御城代其外を看重つめ菓子等來る家

來末々迄遣し候うつりに遣し候品なかりければ淺野へハンを十五遣し候而

あつまよりもちこし品は春の雪はつかはかりを奉り候

と記し遣し候

○八日 晴 青蓮院宮へ御暇乞として罷出るいつ御目見も難計由申上た

るに幸ひ御閑暇也とて御居間へ被召候あいろく御物語尊圓親王之御

書拜見之事願置たるに其御大字其外之御卷物又は御寶物之御うた合御た

にさく等拜見 宸翰之御短尺夥ことにて乍去丈もはくも小さくして至而

龜末なるもの也御歌合など古き經文のうらに記し有いにしへのさまおも

ふへし御暇乞申上たるにいつ再會もしれすさてくのこり惜しきこと也

御酒可被下と之御事に而不相替御懇之事に而夜に入退散也われか家來順
作俊藏なとたしかなるものにてわれは仕合也など御意有江川太郎左衛門
かアメリカ之時家來貳人命とも用立可申と之書狀を附てこしたりとて其
書狀寫をみたりまことかとの御尋無相違事にて右之ものへ金房之十文字
雲林院の大身やりを遣したることと申上候さてく惜しきわかれ也品
に寄瞑土ならては逢かたしと脱カの御意故君は千載の後佛とならせ玉ふへし私
は遅くとも十年廿年には其地へ可參けれと武士故に修羅道へ陥りて義烈
之鬼となるも又其分とも可申哉いつれにも御同道は難成旅にて御目見は
今世もかたかるへしと申上たるに殊之外の御笑なりき御家來のはなし
に左衛門かならにてかく申たりなとよく御異見めきたることは御覺にて
御物語有よし難有事なればけふも又例の狂直をも申上たるによく御聞被
成たるけしき難有事也御料理向とならば格別御立派にて御箸附迄盡
くに重へ入留守宅之家來へ被下候供之ものへも立派なる御料理出申候

○九日 晴 瓦屋霜白し○備中守殿へ出る禁裏附を兩卿を呼に來る 勅答の御日限かとおもひたるに手間とれ候得共等閑にせしにはあらずと之御挨拶也一同再ひあくびして退散せり

○十日 くもり 更に御用なし書物にもうみ候ており庭に出ねむりさましに歩行はしめはめつらしといひたる東山も今はみるもいやにあき果たり

いくたひか庭におりたちななむれと只うちかすむ東山かな

東山霞の衣はかきぬとも雨にはなせそさくらさく頃

太郎十五也出精あるへし桶狭に今川をうちし時は乍恐東照宮は御十八信長は廿六太閤は廿三也一體人は二十歳前に凡そ普請は出來て夫々後はうち造作等に入念かことし太郎はや三四年中にめぼしくならねは五百石の盗人となるへし祖父か五十年の苦を只とるとはあるましき事也出精すへし

○十一日 雨

雲蔽斜陽去過暄厭絮衣明朝必容雨翠靄滿崔巍

と申候これ京都雨前のけしき也○昨日御用狀到來候而井上を五日附之書狀來る官吏出府いたし候由也人々井上之心配を察入候由申之候ハルリス着之由は今日傳 奏を以申上候而且 勅答之事承るに近々と計也昨日も其ことに付岩瀬へ申遣候事有之候

幾たひか庭におりたちななむれと霞はかりの東山哉

旅宿を東山みゆればかくは申遣したる也○井上を書狀に太郎敬次郎井上へ參候而乗馬いたし太郎尾はな栗毛をよく乗たりとて信州大に悦て申來れり其外大風のこと承候而驚申候○尼崎先又右衛門隱居いたし候由諫争候而隱居候由申候ものも有之候彼並々ならぬ人にて且別段親敷もいたし候故尋遣し候其書狀之大意われも不遠隱居之積に而既に其衣類等をつくれり一蓑一笠にて大坂へ行瀧尾山のもみちをもみるへきよし等をしるし

て其末へ

逢ことのかたくも有哉難波かたはつか一よの隔なからも

と記候又右衛門之隠居御城代何故に御聞届候哉

○三月十二日

雨内外のふみやつこと遣ひつ、君と仰かむやまと魂五月雨のあ

かゝる丸木橋わたるを常のこゝろとはせむ山吹のみはなきものとおもふかな公に奉るす
る文字をみつゝも急なはちりならましを運さくらひと静けく盛みすらむ生初るす
しかたのまゝに盛えなむまかれるふしのあらぬ竹の子さく花の梢も今は深みとりめて備
しいる香は夢にやはあらぬとてもうたはよめぬ故に心學本のことときことなふ也

中守殿御旅亭へ参る○十四日十五日十六日御参 内之義申來るこれにて

御用かた附へし

○十三日 くもり 備中守殿は出る御暇 御勅答のこと今日も御沙汰な

し○都筑をいろく〜と餞別來る○蓮門昨夕を御参 内之由蓮門少々云々

有之候而六日に御里坊を御本坊に御引取也八日に御逢之節けふははい所

之月也却而われにも夫かために逢ことも出來る也と御意ありき昨日を参

内之上はまた御用多かるへし此宮此節第一之 御意に應せさせられたる

御人に

主上御酒宴之節なと是非被 召候事之由

主上殊之外なる御英武のこと御好と之風聞なれば蓮門と乍恐御相口と申

御ことなるへしよりては以前を左衛門尉か蓮門へ奉るリカるものに不思議

におもふことの有ものなとは存外之所に出たるもしるへからすけしから

ぬ所に左衛門尉かと御承知之由なと申候者も有之候左もあるへし先達

而蓮門へ奉る蒲萄酒又はアメリカ蠟燭パン之類殊之外に御喜ひなりしか

御近習之人もしらすと云なと可怪こと也左衛門尉などの名雲の上までも

聞へたるとは恐入たること也○京都岡部備後守同心吉岡伊和助伴鏡次郎

と申候もの來りて所持之刀の鑒定を乞中心濃州住人安東伊賀守殿任望同

國關藤原孫六尉兼元造之天文三甲午曆八月日とあり我井上信州へ贈りた

る兼定に武田左京大夫信刀トナ所藏の銘と同じ珍刀也

○十四日 微雨 關東を大坂長崎へ参候面々参る○大久保大隅守都筑駿

河守へ玄關迄参るこれはいろく〜と煮染などをくれ且被参候挨拶也今日も備中守殿参 内之御沙汰なし七ツ時過迄に三度人を遣したるに沙汰なし

大に弱りたり老か身もむかし變らす聞ものは長閑くしめるはるさめの音 またてみしなひかれ行羊に日の長さかな あまつ空に身をまかせたるわねなればやよまかつみよまに〜にせよ 焼たるに汝をなしてむはるかすみ匂ひ深かる東山かな ○平山健次郎を美人多く集たる圖にうたを乞ければ 女子てふ文字を集めてスキといへる昔の人のこゝろをも見よ 並てみよ天キ女の二ツ文字心まとはすものにあらずや 國も城もかたふくといふこと知りてよく樂まむ物はこのものいへるはなのうつし繪みよし野の千もといふことはおしけたれけり ○なよ竹の風もさわくはうつもれて獨聲ある松の雪折

○十五日 晴 今日も御用有て二度迄備中守殿へ罷出るされと参 内勅答の御沙汰なし

○十六日 晴 今日五ツ時頃を深夜までに御右筆其外岩監察并平山健次郎淺野和泉并地役等來りて大にいそかし例刻備中守殿御旅亭へ参る

○十七日 晴 備中守殿御旅亭へ出る今朝六ツ時頃都筑駿河守小用に参候お倒れ右之手足少もきかす且人事不定に参候お倒れつゝつまらぬ事をなとを申す由急に家來を遣し候醫師中風也と申よし扱々歎息也立田祿助参候御用向は先ツ彌十郎にたのみ今日は看病いたし居候由也駿河守予に一ツ下也この鉢をみても彌歸府もし御褒美被下たれば隠居すへき事也人の禽獸に殊なることは子をよくいましむると自殺するとの二ツ也これ愛よりも死よりも重きこと有な知靈妙なる

所也其に似たるは身の出世にくるしむ人は多しやすく世を捨るはかたし予既に今世におもひ願ふことなし足ることを知り賢者之道をさけて可然もの身を忘れて大事之場之御奉公するは豪傑にて今一段上り急度か様にすへきと云自大丈夫之手こたへある人も其余は賢者之道をさくるといふ辭も有也さて又亂に隠居なとする士はいかゝとも可申歎され共十分に諫をいれたる上之事は子細あるまし微子箕子中納言藤房を不忠といひたることなきを以知へし

○十八日 晴瓦屋霜 午後備中守殿へ出るいまた参 内之沙汰なし ○都筑は今五ツ時過憲藏を見廻に遣し候處昨日夕かたを二度吐有之候處夫

を病躰六ヶ敷相成候を衰弱およひ候由也病床へ参見受候處目を閉候を喘息有之候計と之事也禁裏之醫其外參 大に驚候を兼申付置候見舞之重つめ 出來來候を爲持遣候處此時は四ツ半前に歸候を使參候節ははや差重之由 申聞るさて〜人世のはかなき今にはしめぬことなから可歎極也され共御役宅に大病御用をも取扱なからの事今世に少も望なき左衛門尉などはうらやましく思ふ也立田祿助の上京不幸中之大幸と可申候 ○尼崎又右衛門事當時 方へ書狀遣し候返事來るわか昔よみし吹かせにちると散らぬは任 花かうたを記し候を隠居之了簡以之外也とて藤房かことまでを議し來る

これは賢者之ために道をさく
るといふことを不心附故也

○十九日 晴 薄暑のけしき小袖一ツにてよろし○御参 内之事彌明日
なるへしと之義所々を申來る○日くれに備中守殿を歸候而按摩させ居た
るに肩のはり來ること夥し首筋をゆるかことくにてひや汗出て胸わろし
按摩に強くもせけれと少もきかす卒倒にてもいたし候而はわろしとおも
ひて俊藏を呼出置たり夫をあむまに所々はりを打たせてみたるにゆるみ
たり消毒丸をのみたれと胸はやはりわろし考候而のとへふさ楊枝を入
かき廻したるに夥しく吐たり夫をよろしよくふせり申候此節かゝる症多し
あんまいふ唯今も
はやうちかたの療治いたし來たりとわれも其輕きものなるへしひや汗出てかた首筋の
つまりたることは一度もなし故に驚たりあんまのはなし都筑之様子所望之卒中風のはし
まりかとおもひたるに
左にはあらざりし也

○廿日 晴 備中守殿已之刻御参 内 勅答之趣御承知御歸り也○今朝
は常之通也腹もへりてめしの味よろし昨夕吐し故なるへし九時より備中
守殿御旅亭へ御待受として参るこの躰にては當月中の出立となるへし

○廿一日 晴 昨夜備中守殿御歸は六ツ頃也夫をいろくくと調物いたし
候而歸候と無間も九ツ也今朝は例を早く備中守殿へ出る今日之様子にて
はかたひら等取よせ候積也中々歸府之程不相分候
○三月廿二日 晴 九ツ時備中守殿御旅亭へ出る傳 奏議 奏被參候六
時歸宅也

○廿三日 晴 庭の牡丹さかり也

○廿四日 晴 九ツ時過を傳 奏衆議 奏衆共に備中守殿御旅亭へ被參
候間罷出申候いろくくと御用向有之候いつ頃の歸に可相成哉一向に不相
分候○禁中にて日々御酒宴之節蓮門に出候御料理御獻立拜見候處 御煮
物山の芋 御汁 ゆは 御香之物 二品 御二之膳 御煮染かむひやう
椎たけこんふ
すまし汁 御ひたし菜 御重香 大和芋 御湯漬 山い
初霜 御吸物ゆり 丸ゆは ませつけ 御にしめ 切い
雪のさ 御香の物 御鉢肴三ツ 色漬かへゆは つけいも 御ひたし
すまし 御吸物 のり 右にて御料理の御手輕なるをしるへし

主上は御酒を多く被 召上候處地酒にて不宜御品之由炎上假 皇居中い
たみ酒を近衛殿にて御内々被 召上候亦殊之外 叡慮に叶其後は月に一
樽ツ、内獻上有之候を被 召上候由なり右を以おもへは此方共之食物は
干魚に濁酒にても大に過たり罰あたるへし以後可慎事也○京都には非藏
人といふ者は日勤五位にて日々束帶勤也御米五石被下候者也○今日牡丹
の散に驚て

たくひなきはなとおもへははつか草はつかにちるも夢の世の中

○三月廿五日 くもり 岩瀬肥後守出立也同人は今般之一條發頭人に付
よく辨居候處歸府候故心細し

○廿六日 雨 傳奏廣橋大納言殿議奏久我大納言殿坊城大納言殿備中守
殿へ被參候右に付罷出る右三人と談論いたし申候さてく魯西亞人并百
姓共を取扱候は何となく氣分六ヶ敷候官職おのつから人を壓するなる
へし○江戸を備中守殿へ申來候旨には廿日に海防懸一同へ拜領物有之

候亦左衛門尉も八丈縞二反被下候由難有候

○廿七日 雨 備中守殿御旅亭へ出る○青蓮院宮此ほとは關白殿を御參
内は御差止之由御用には被 召候節は御出然るに日ことに御 召之由也
○廿八日 雨又晴 備中守殿を呼に參候亦罷出る
○廿九日 くもり 備中守殿は出る○存外之衣かへにて上下大に困り申
候着類三ツ袷に直し申候家來共もいろくくと申也

○四月朔日 くもり 昨夕を冷氣也今朝は人々綿入二ツ也○耳ますく
わろし其外に病氣なし備中守殿醫師三宅良齋にみせ候處やすくと直る
よしにいふ也いかあるへき達吉之藥百ふく余のみたり更にきかす耳に
は青木之藥も同じ聞かぬは聾の故なるへし鹿の首よしと黒焼にて一ツ給
申候○御用暇に明忠肅公于謙傳をよみて喟然として感歎して忽にこゝろ
やすくととなりたるかことし

胸中積戔消如雪敲案頻思慙肅忠功覆乾坤亦冤死男兒先學殺斯躬
答醫

衰躬漸近六十年自識死期在目前不願逞奇回強壯只希補得保天然
又題于謙

獨開活眼叱驕夷救得乾坤累卵危丘垤泰山非異物即今可學此佳兒
山水圖

奔走勞王事輪蹄四十州猶看斯畫妙忽憶探奇遊

○二日 くもり 備中守殿へ參る彌五日之御出立也

○三日 晴 所々の暇乞として參るいろ／＼のすかたしたる女共集りた
るかたに讃を乞はれて

好^{ヨキ}をわけ天^{ツカ}き女を集たるころこめしもみゆるうつし繪

これは女子は妖^{モノケ}也といふこと也○青蓮院宮を顯文紗之狩衣地御はな
かみ鼻^{蓋カ}御茶被下候る左衛門尉へ直に申せと之御こと傳有備中守殿へ出候

青蓮院宮は御暇乞と
はして不參こと
これ子細有
こと也
此宮之御
寧御深切實
にことあら
可盡にあら
す日ことに

主上之御側
へ必出候
は此宮御一
人とは事故
都御勢もさ
の御も左衛
門尉は以前
に之御懸命
とさへに如
此恐入たる
のさきり也

亦歸も不知によりて俊藏の御使者申置て歸りたりいさゝかおもふ所有け
れは即刻御禮として歸り俊藏を遣す同人は御存知に付御直に被仰含旨有
とて待居たるか堂上之類に參殿故に御逢はなし御直之積に而段々と被仰
旨も有此節此宮には大臣以上之人も大に敬服する也

○四月三日 晴 前に記すことく所々へ暇乞として參る其内駿河守之位
牌を拜むいとかなしこの人三十年來のなしみのみならずなら奉行中大津
に被居候る別懸故也

○四月三日 晴 備中守殿御暇乞として參る○地之御役人町奉行御附等
追々被參候○水戸殿御家來安島彌次郎上京いたし候に付呼寄及面談候

○五日 微雨 六時前之供揃に而京都寺町天性寺出立いたし候る草津に
る晝休いたし守山宿へ止宿也備中守殿は大津御晝に而草津へ御泊也順々
御先へ參候積也○我二十五才之節文政八酉年二月十五日に京へ參候かは
しめにも邊地は長崎佐渡めつらしきは木曾山の奥に六十日小屋懸に住居

并なら奉行大坂町奉行其外下田へ三度房總へ壹度 禁裏御造營今度之備
中守殿御陪從并なら六年中京へ参ること一年に兩三度宛放旅は家來共
もなれて下田へ参るときは曉におもひ附候而供揃申付例刻登 城 御朱
印を受取直に歸宅なしに川崎迄参り止宿する位に上下共になれたりなる
ゝにつれて藥など持歩行ことなど忘るゝにいたるいつも始而之旅立之こ
ゝろよろしされ共旅の極意は陣中の心得に在いかに不自由なり共我慢し
てよき修行とおもひ藥等之外は何事も事少に事をかきて辛抱するを以第
一とすへしさすれば少も不自由なることなく無造作にてよろしいにしへ
旅をくさまくら又は小笹の原にてねかぬるよし等歌によみいせ物語にほ
し飯を給しけしきにても本陣の上ケたゝみなどなきこと勿論也われ旅なれ
て不自由なきはこゝをおもへは也以前三品は一品衣類三ツは一ツといた
しかなり乍去容易に心得へからす桐油陣笠細ひき等不時之備且くすり之
類出立前に自身と糺置へし人まかせにすへからす旅なるゝほと主も家來

も旅を容易におもふ也よりて取締にも拘る也なるゝにつけて可愼は旅也
可心附は旅也其上水夫に被遣道の掃除出迎又は村入用之夥事よくこまか
に察し候而百姓共を憐み行違あるともあらゝ敷ものをいふへからす百
姓恐れて却る役にたゝぬ也助郷之人足か農業を三日もやすみて五六里只歩行之類
へは酒肴を出し村役人共もともにのみ食ひ二升之酒は壹斗とも帳面に記し其入用は不殘
麥めしもよくは食せざる百姓共迄へ割かくる也百姓之可憐こと如此其外内輪へ立入見た
らば驚ことあるへし以前御老若御乗切之勘定帳を
上ケさせ見て驚歎して伊勢守殿へ懸御目たりし也

○六日 晴 拂曉に守山宿出立いたし候而武佐にて晝休いたし候而鳥居
もとへ止宿此本陣は大坂へ行とき庭のみゆる山にて火例之通歩行也幸ひあまり
もとへ止宿を焚たるな太郎なとか狐火也とて騒し所也暑といふほとにもあらず

○七日 雨午前くもり 曉高橋平作を申越候趣も有之候に付御右筆等待
合候而談判中備中守殿御着に付懸御目候而存意申上候而出立關ヶ原にて
晝休いたし御影寺へ止宿也

○八日 昨夜より強雨にてつむぼにさへ雨たれの音よく聞ゆる位也桐油

にて歩行五里さして濡不申候夫々少々乗輿にて鶴沼にて晝休いたす其内晴に成候間又二里歩行候而伏見宿に止宿也○けふの太田を鶴沼の間は兩海道中第一のけしきとも可申歟藝州の佐野峠此太田鶴沼の間木曾川のけしき扱はおもしろからすとも大造なるは薩埵峠也○雨具にテイル布箆桐油共に用ひためしみたるによき桐油に及ふものなし一二里位の歩行にてはわからぬ也

○九日 晴 六半時伏見宿出立候而細久馬にて晝休大井に止宿也○けふぬけ毛をみるにみな白髪なりければ

衰ふることをかしらの白雪に賢き人のみちやさけなむ

や、山村のみにて朝霜さむし信州のみたけ山はよほと雪也

○十日 晴 昨日々又一段さむし○六半時大井宿出立候而落合にて晝休いたし三登野に止宿不相替之歩行なり足あまりに早し人々迷惑に付今一段遅くいたし吳候様道中師共供頭へ申出候由早速に相改め申候これは馬場にて歩行候

くせ出る故也 ○けふ通行之内中津川宿本陣はわか出入也これはきそ山の頃三十日余出候者則今の主人也よりて小休せしに主人はなこやぬ用あり床に庭田宰相重胤の先達而上下なと遣したり

うたかけ有はし書をみればあるし花にうたを添て出したる返しうた也

わかたために手折こゝろの玉椿いろ香をあたにみてや過へき

と有本陣の亭主は市岡長右衛門と云懐帯をみれば美濃御民源殿政と有宰相重胤に出したるうたはわか山のしら玉椿手折けり八千世かはらぬ君かためとてと有堂上之返歌の徳也 昔はかゝることはしらさりきけふ居らは逢も遣すへきにと申てよみうたの短尺みせよといひたるに當人居るとて懐帯をみせたりあなやみたちつゝくすみ田川うゑぬむかれか悴に俊藏を汝も歌よむかと聞たるにさかしの名やなかるらむ 水郷柳

かりなるうの花にたにさく添て出したり

ほとゝきすなく聲よりもめつらしき君まち得たるやとの卯花

とすらくと即坐に記し大に驚たりわれ目をみはり候はかりにて返しうたもなしこの事大和物語ならむには昔ある男公のことにて昔あひ知れる女のもとを左衛門尉此道中は惣綿服にてこくらのたちつけ本陣の悴政

○十一日 晴 昨日東海道を美濃路を廻り候る早川庄次郎着之旨追々注進有之候何事歟と驚候處さして之事にあらず其旨申來り安心せり○今日
はみとのより野尻之晝休福嶋にいたり止宿なりねさめの里にて例之蕎麥
大食一重給たるに御上のはなしと云再爲打候る又一重を少々のかしたり
○原彌十郎之書狀之末に

江戸よりの便もてうと木曾のみち今宵はこゝに落合の里
とよみ有其返事之末へ

絶稱驛名句言盡巧還新誰知原内史即是蜀山人

御返事を一寸みとのてねさめよく蕎麥も十分原はらさむさくう

木曾之谷に駒を産す山をかけあるきても爪何ともならず且至るおとなし
き馬之由大瀧の邊これは以前参たる所也御た都福嶋七里余山奥のかた殊によしと也半
夏の頃ふく嶋にて馬市有夥馬之由三四兩位ならば最上也と申也至る丈夫

之由此内を撰ひて尾州之御用馬になり候由

蕨もち三ツ
給候高き百
正遣す米代
もの也止
共木錢々々
に度々止
宿いたした
はれ可也

○十二日 晴 六半時福島出立候る奈良井にて晝休洗馬に止宿也此邊は
さくら海棠つゝし等しやくな木之類みな花さかり也寒國はかくと聞しか
はしめて見申候○木曾之川鳥居峠を西は西南に流れて桑名之海へ出鳥居
峠を東は東北に流れて越後新かたへ出る也これによりてみれば此邊は兩
海道第一之高き所なるへし○櫻澤の建場之熊殊に大きくなりておそろし
きけしき也十一歳也と申也太郎か大坂へ参たるときは小なる熊也太郎共
に成生おもふへし○熱川宿之本陣之隠居申は彌吉様と被仰候節は御宿い
たし御目通被仰付たり今は難成され共右已來度々之御宿をもいたすに付
御書被下度旨也其頃之もの中山道には此もの一人也目通申付候る歸府之
上書を可遣旨申聞遣し候

○十三日 晴 よほと冷氣也胴着并わた入羽織にて歩行汗不出○六半時
早メ洗馬出立候る下諏訪に晝休いたし候る和田へ止宿也○諏訪に大
しゝみの汁也承るに四年前に江戸表を種を取寄候る生したりと申也こゝ

にてはわらひにうとのひら也なか／＼によし鹽魚等を煮たるとは大にこ
と也よりていふ料理人さへよきかあらは天下に人材なくともことかくこ
とはあらし○和峠にてみればさくらの少々開きかけたるも今さかりな
るも有

ほとゝきす鳴に卯月は知らなからなをあやしまる花の眞さかり

けふは鹽尻峠も和峠も皆歩行也つかれなし

○十四日 晴 五ツ時前和峠出立候も蘆田に晝休いたし候も九ツ時
過八幡へ止宿○此邊麥は一向に穂に出すまたわかしされ共花はなく全夏
けしき也

○十五日 くもり あさまの麓七里ヶ原邊より笛吹峠へ全に雲の中を歩行する也かけけしからぬ

霧也杖拂の腰より上へかすかにみゆる位也よりて建場ことに玉子湯并梅
干を二ツツ、入たる砂糖湯を用ひ申候○曉に八幡を出立候も追分之宿に
て晝休八半時頃上州坂本へ止宿也○追分の宿の名を忌み候も御縁組の姫

宮は決る御泊りなし出迎之ものも追分宿とは不申相追ひ宿と其時限り申
候由也され共本陣に古き姫宮之札はみえたり

○十六日 雨 六半時坂本出立に碓氷御關所之改受候も安中に晝休
くら賀野にて止宿○御關所を過て梨子木といふ立場有こゝは御關所改中
太郎か慶次郎を牛にいたし神田出しの眞似して遊ひたる所也折々麴町又
は池の端へ買物にやれなど道中にて申たることを俊藏申出候も一同にて
笑たり○昨日は前に記す通之霧に付山嵐障氣之毒を恐れいろ／＼と手當
したれと少々あてられて風邪也よりて今日は歩行なし俊藏健藏も風氣也
と申も不換金障氣散など云薬もあるわけ也○板倉主計頭家來町奉行山田
三郎といふもの以前より知人也漆木植附のことに委しと聞て尋たるうち
に漆に蝸牛を潰して交れば漆色別段によろしと申たり漆かふれはいか様
なるにてもひよとり上戸と忍冬との湯をたて、遣へは追こみなしによく
直ると申たり心得置へき事也八犬傳にはかになつふし
てつづけるといふこと有

○十七日 晴 日光の御祭禮日なりと申にことの外なる快晴にてこゝろよし○六半時にくら賀野宿出立候而深谷宿にて晝休いたし熊谷宿に止宿○今日も風邪にて歩行なし建場にてをかひまきにてねころひ居申候○左衛門尉廿五歳之節深谷宿より案内に出たる太八郎といふ宿役人有このも才子にてシンカイノ荒四郎か子孫今は蕎麥やにてこゝに住居いたし岡部之六彌太か墓はこゝ也とて案内して上州武州はいにしへ武を用ゆるの國也と申たるよしなといひしことを今日おもひ出て深谷宿之役人に太八郎といひて三十四年前に凡三十歳はかりの者今も有やと承たるにそれは宿内にて之利キものにて學問も出来男谷彦四郎か弟子にて書をもよくせしか三十六才はかりにて病死いたし候由を申たり長壽ならば聞ゆるものとなるへし左衛門尉二十五歳之節東海中山之兩街道を通たる時覺たる計に而其後頻通たれと少しも覺たることなし既此太八郎かことし今ならば其日の夕かたは忘るへし太郎慶次郎など一生のこと二十五才迄とおもふへ

し二十五才までのこと段々とみのりて人にしられ役にも立也二十五才まで目ほしくなくては人の上に立ことはなりかたし二十五才之節までと申内に二十才迄之内に凡出来て二十五才までに八九分をつくし夫々七十までにて残りの一二分をつくすこと也

○十九日 晴 五ツ時前上尾宿出立候而浦和にて晝休いたし板橋宿にいたり止宿也○太郎乗切に而来る同人に逢不申こと九十日正月廿一日はかりしかるに一かさ丈高くなりたり九ツ時過之着なりしにはや參たりよりていろくくと物語などするにおもふよりもこと辨たるかことし丈と共に了簡も附たるなるへしよりてわか平日のこと等詳に申聞かせ候譬は其一ツをいふときは本陣にて新しき白き麻の手拭をかけ置たりいまた用ひ不申候内にそれはわか道中用ひ來りたる古き手拭とかけかへさせて新らしきは返したりこれは本陣へ木錢米代に而旅宿すると更に入用たらすよりて夫を宿の入用とする也其時は庭をはく人足も湯をたつる人足も入用にた

つること也そのみならはまたもよきに元來の入用に貳割も三割もかけ
てとる也よりて帳面之表は大造なること也夫を宿内へ割ときははつかに
いとをとり一人くらしの老婆までも割合錢を出す也其なけきはみな其役
人にかゝる也よりて天道御ゆるしなく必後に災かゝる也其當人は幸ひに
まぬかるゝとも其子孫には必其報ひ來る也されはこそ鶴匠鷹匠役の末と
申てよからぬものとはいにしへより申傳ふる也今この手拭一筋の儉約可
笑ことなれともこれにて九牛の一毛の天道は之申譯をいたす也恐るへき
こと也其災のおそろしさにする故に道理もならず隱徳にもならず矢張利
欲の内より出るなれともせぬよりもよければかくはすること也と太郎に
物語きかせし也

○廿日 くもり 五ツ時備中守殿板橋へ御着に付一同罷出候懸御目申候
畢ち一同夫々歸宅也

昭和九年三月二十日印刷
昭和九年三月廿五日發行

川路聖謨文書第六
非賣品

不許
複製

編輯代表者 藤井甚太郎
東京市本郷區駒込東片町三十番地
東京市四谷區新堀江町三番地
日本史籍協會代表者
發行者 早川良吉
東京市京橋區湊町三丁目八番地一
印刷者 高橋赤次郎
東京市四谷區新堀江町三番地
發行所 日本史籍協會
電話四谷三二八七番
振替東京三九四五番

終